

# 球磨村 おがわ瓦版

令和3年2月15日  
編集発行 宮原 修  
090-9585-8894

## しゅんなめじよ作り

### 渡小学校と小川班

小川班では、25年目を迎えた新春恒例の伝統行事「カジの釜茹で・カジの皮剥きとしゅんなめじよ作り」が、1月10日(日)に小川地区内の椎谷供水場(しいだん)で行われた。

毎年、この行事に参加している渡小学校(児童75人)は、PTA行事で地域の昔の文化の体験を通して小川班と交流を続けているが、今回はコロナ禍の影響でやむなく参加を見送っていた。そのため、小川班は「しゅんなめじよ作り」だけでも体験してもらおうと渡小学校へ、しゅんなめじよの材料一式(皮を剥いたカジの木や竹串としゅんなめじよを差す俵など)を贈った。

1月22日(金)渡小学校(一勝地小学校敷地内の仮設校舎)では3年生児童(12人)が、総合的な学習の授業で六時限目に「しゅんなめじよ作り」をした。授業は担任の福田智義先生と球磨村教育委員会の簗田恵さん(小川班)が指導した。はじめに簗田さんから「しゅんなめじよ」の説明があり、教えてもらいながらカジ紙で衣装を作



作り方を教わる児童



完成したしゅんなめじよ

り、衣装に思い思いの絵柄を書いた。竹串に刺したカジの木に顔を書いて衣装を糊付けした。そのあと出来たしゅんなめじよと粘土で模した三種の餅(米、栗、よもぎ)を榎木の枝に刺し俵に飾り完成した。

児童は「人形の顔を描くとき変な顔になっておもしろかったです」「みんなかわいくできて楽しかったです」「餅飾りを楽しみながらお米が一杯取れますようにと願って作りました」などと話し、意味も理解しながら作っていた。「しゅんなめじよ」は職員室前に飾られた。来年は小川地区住民と一緒にできることを楽しみにしている。



## 山あいに笑い声響く!

### 渡地区系原班

JR肥薩線渡駅前より村道渡大槻線を約2.5kmほど行った系原地区では、昨年12月4日より地域住民らで空き地を整備して、グランドゴルフが行われている。グランドゴルフは週

三回(水金曜日)の午前10時から始め、毎回10人ほどが仮設団地や近隣地域からも参加して『ホールインワンだー!』 惜しい!



『ホールインワンだー!』 惜しい!

楽しんでいる。参加者はコロナ禍の感染対策を取りながら、ゲーム中や休憩時も球磨弁が飛び交い、終始笑いが絶えない時を過ごしていた。

球磨村グランド仮設団地から参加している中神ゆみ子さん(茶屋班)は「家でテレビを見ているより、グランドゴルフをしている方が気晴らしにもなり楽しい。楽しみは自分で探さないと」と笑顔でゲームを楽しんでいた。系原班は、7月豪雨で系原橋が流失し一時孤立したが、グランドゴルフで新たな地域のつながりもできてきた。



お茶も楽しい時間に

## 球磨弁! パート30

### わかるかな?

オロロン || おたまじゃくしの卵

ゴマンゾ || 小魚

みゃんち || 毎日

じゃなか || 違う

せく || 閉める

ひゅうたぶら || お尻

かるか || 考えが甘い

いきみしか || おちやつか || 意地悪い



# 球磨村地域 支え合いセンター



仮設住宅を訪問する支援員と入居者

球磨村地域支え合いセンターとは、仮設住宅に入居されている方や自宅避難されている方が、地域のつながりの中で安心・安全な生活を送れるように孤立を防ぎ、生きがいを育み豊かなかわりを生み出すこと、そして被災者一人ひとりが早期の生活再建をできるように、日常生活の見守りや相談支援などを行い、球磨村社会福祉協議会が球磨村の委託を受けて、10月22日設置された。

同センターは職員20名で構成され、被災者宅（仮設団地、自宅）へ戸別訪問し健康状態の確認や生活状況、お困りごとなどを聞き相談に応じています。また、渡仮設団地と錦町仮設団地で、週各三回「みんなの家」に支援相談員二人が常駐し対応している。

戸別訪問している支援相談員の稲田理沙さんは「話し相手がいない」「これからの生活が不安」「村の方向性を早く示してほしい」などの声があると、センター長は「ひとりで悩まないで気軽にご相談ください。」

**お問い合わせ**  
 受付時間 9:00~16:00  
**0966-34-6500**  
 球磨村社会福祉協議会  
 球磨村地域支え合いセンター

支援員が戸別訪問や電話で、生活上のお困りごとなどをお聞きし、必要な方には行政サービスや関係機関を紹介します」と周知を呼びかけている。

## 思いつのままに

今思うこと、災害発生から半年が過ぎ我村と我が家の変わり果てた姿を見るにつけ、悲しさと、悔しさと、空しさを感じる毎日である。

こう言うことを思いながら身体は前に進むと思いつながらも、心が中々に進むことができない、そういう切ない日々を悶々と過ごしている毎日である。でも、これから焦らずゆっくり少しずつ前へと歩みを進めたいと思う今日この頃である。

(岡田如水)

校庭から子供たちの元気な声が消えて久しい。

令和2年7月4日、あの大水害で村の様相が一変した。高台の小川地区でも3軒が全壊した。小学校の校舎、体育館、校庭全て被災した。隣接する千寿園では、多くの方々の懸命な救助活動で、避難させることができたが14名の命が奪われた。我が家から見える九割方は水没した。

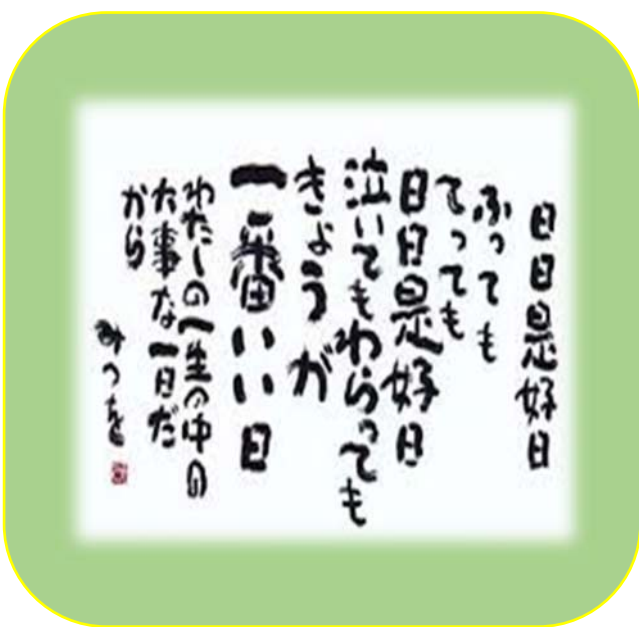
あれから半年が過ぎ、土砂を満載したダンプが行き交い、家屋の解体作業が始まり少しずつ前へ動き出した。しかし被災された方々は、今後新たな住ま

いをどうされるのか、住宅新築もままならないお年寄りはどうされるのか、泥に埋もれた田んぼが以前のようによみがえるのか、離農家がでてくるのではないかと、不安が募るばかりである。村の再生計画も今ひとつ具体性にかけているように見えてならない。

脳裏に焼き付いている姿に、一日も早く復興できる日を願うばかりである。

皆で、力を合わせ、心を合わせてこの難事を乗り越えていきましょう。

(原文のまま)



相田みつを詩集より